名大の時間 586

平和とは何か、歴史から学ぶ

―北海道における戦争孤児支援の実践より

戦後80年を迎える今、戦争孤児という言葉を耳にする機会はほとんどなくなった。これは日本社会が長く平和を保ってきた表れといえる。しかし、未だに虐待や貧困、災害、紛争の影響を受け、満足に生きられない子どもたちが存在している。これで、日本は平和な社会だと言えるだろうか？　その答えを、歴史の視点から考えてみたい。

私は昨年度、北海道における戦争孤児の戦後史を共同で研究する機会を得た。その調査を通じて見えてきたのは、戦争孤児の支援に携わった人々の実践が、現代の子ども家庭福祉のあり方を考える上で大切な手がかりを与えてくれるということである。

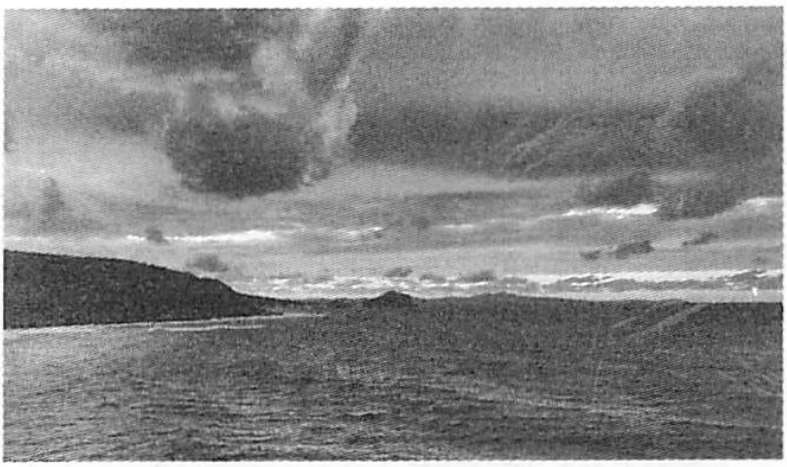
第二次大戦の終結後、各地の戦争孤児は児童養護施設に入所することになった。札幌の興正学園や富良野の国の子寮もそれらの施設の一つである。ただし、そこは特別な理念を掲げる場でもあった。

札幌の晟徳寺住職・秦元勝は、戦災孤児を「保護の対象」ではなく、ひとりの子どもとして尊重すべき存在と考えた。「自信教人信」―自らを信じ、人を教え導くという理念を掲げ、寺院を開放し、家族のような温かさと社会的な支えの両方を大切にした生活の場を築いた。

一方、富良野で国の子寮を創設した名取マサは、戦争で親を失った子どもたちを「国家の責任によって生まれた遺児」と捉え、地域や行政と連携した体制づくりに取り組んだ。名取の「この子たちは孤児ではなく"国の子"である」という言葉には、社会全体で子どもの命と暮らしを支えるべきという信念が込められていた。

秦と名取は、戦後の混乱のなかにあっても、子どもが人として大切にされる場所をつくろうとしていた。制度がまだ不十分な時代にあって、孤児たちの「家」を新たに築こうとした両者の実践は、子ども家庭福祉の根本につながるものと考える。

いま、戦争孤児は私たちの身近にはいない。しかし、子どもの不幸はなくなっていない。ならば平和とは、戦争がない状態を示すのではなく、子どもたちが安心して暮らし、未来に希望がもてる社会を築くことではないだろうか。



北海道で重ねられてきた実践の記憶は、その大切なてがかりになる。秦元勝と名取マサが示した「子どもの尊厳を信じる」という姿勢は、時代を超えて受け継がれるべき福祉、そして平和の原点なのである。

社会保育学科准教授　鈴木　勲